

知っておきたい 加味逍遙散の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長／内分泌代謝科 部長

出典 万病回春

加味逍遙散の出典は、『万病回春』(龔廷賢 1587年)の巻之六 婦人科 虚勞である。

効能又は効果

体質虚弱な婦人で、肩がこり、疲れやすく、精神不安などの精神神経症状、ときに便秘の傾向のある次の諸症：冷え症、虚弱体質、月経不順、月経困難、更年期障害、血の道症

古典に見る加味逍遙散

万病回春 (龔廷賢 1587年)

加味逍遙散は、『万病回春』の女性疾患を扱った巻之六 婦人科の「虚勞」において、「虚勞で発熱・咳嗽し、自然発汗している者」の治療薬として記載されている。すなわち、結核などの慢性炎症性の消耗性疾患に用いられていたことがわかる。

太平惠民和劑局方 (12世紀)

『太平惠民和劑局方』(巻之九 治婦人諸疾)に逍遙散が記載されている。慢性炎症性疾患による消耗や、若年女性の結核を思わせる疾患に用いられていたことがわかる。

内科摘要 (薛己・1529年)

「加味逍遙散」の初出は『内科摘要』だが、組成は現在の加味逍遙散から薄荷と生姜を抜いた組成である。条文の内容は『万病回春』の逍遙散の条文と同じである。龔廷賢は薛己の説を引用し、さらに薄荷と生姜を加えている。

女科摘要 (薛己・1529年)

加味逍遙散は薛己の著作で女性疾患を特集した『女科摘要』にも記載されており、泌尿器症状や痒痒感にも用いることが記されている。

勿誤薬室方函口訣 (浅田宗伯・1878年)

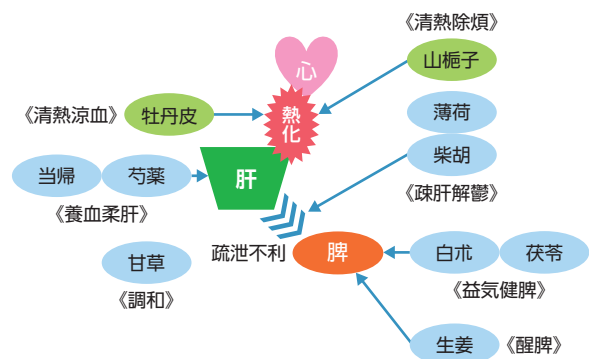
『勿誤薬室方函口訣』では、頭部の痛み、顔の熱感、鼻血、婦人の排尿時不快感から皮膚瘙癢症、手掌角化症にも応用されていたことがわかる。

加味逍遙散の方剤解説 (図1)

加味逍遙散の適応となる病態は、肝鬱化熱、心煩火旺、血虚血瘀、肝脾不和である。

図1 加味逍遙散の方剤解説

- 肝鬱化熱：イライラ、抑うつ、胸脇苦満、脈弦、めまい、月経不順
- 心煩火旺：ホットフラッシュ、不眠、胸苦しさ、動悸
- 血虚血瘀：下肢の攣り、眼の疲れ、月経痛
- 肝脾不和：腹痛、便秘



女性の生理機能と病態

女性の生理機能

漢方では女性の生理機能を、肝を中心に考えている。女子宮には任脈と衝脈の2つの経絡を通じて血液が供給され、それが月経になると考えている。特に任脈は腎に、衝脈は肝を中心に、女子宮に対して月経血が供給される。

また、漢方では女性のライフサイクルを7の倍数でとらえる。すなわち、14歳頃に天癸がやってきて月経が始まる、28歳頃に身体的機能が頂点に達する、49歳頃に天癸が尽きて閉経する。

知っておきたい加味逍遙散の基本と臨床のポイント

月経困難症

月経困難症の中核となる症状に月経痛がある。漢方には「不通則痛」という概念があり、気・血・津液の流れが停滞すると痛みを呈すると考えている。

月経で問題になる滞りの要素には①血瘀⇒瘀血、②気滞、③内寒、④湿・痰があり、これらが痛みの原因となることがある。

また、「女性の先天は肝」といわれており、女性の月経・生殖・老化と深い関係がある肝は重要であると考えられている。

月経周期の乱れ

月経周期の乱れを漢方では以下のように考えている。

- 月経周期が早い：血熱ではほてりが強い、脾気虚では食欲不振、下痢をきたしやすい。
- 月経周期が遅い：血寒では冷えが強くなり、血虚では下肢の攣り、目の疲れ、髪がやせる、などの症状が現れる。
- 月経周期が不規則：肝気鬱結でイライラ、抑うつ、胸脇苦満などの症状が現れる。

更年期女性の生理と病態 (図2)

更年期になると肝血が月経によって消耗される。肝の陰血が不足すると陽気が上亢をきたして気機の失調をきたす。さらに気の流れが滞ると鬱結した肝気が化火して上炎する。これがホットフラッシュであり、同時に激しい情動発作が現れる。そして気の過剰な運動である内風(肝風)が起り、痙攣や感情失禁様の情動運動発作などが生じる。さらに気の流れが悪くなると血瘀を生じる。このような一連の病態が更年期症候群の女性に現れる症状であり、加味逍遙散は一連の病態に合致する処方である。

図2 更年期の女性の“生理と病態”



現代医療における加味逍遙散の臨床応用

● 症例1 52歳 女性、主訴：情緒が不安定(図3)

本症例の弁証は肝鬱化熱、肝血虚、瘀血、肝気横逆、湿盛であり、まさに加味逍遙散の証に一致していた。肝気横逆は、肝脾不和のより上位の概念であり、脾や胃に問題が起きているときには肝気横逆とされる。

図3 症例1 52歳 女性

【主 訴】 情緒が不安定

【現病歴】 約2年前より月経周期が前後するようになり、月経の約1週間前より理由もなくイライラし、家族にあたるようになった。月経直前は以前からある腹痛と頭痛、倦怠感、顔のほてりも増悪するようになった。

【漢方的所見】

- 興奮気味に自分の症状をどんどん話す。月経の1~3日目までは腹痛が出現する。食欲はあるが胃もたれしやすい。倦怠感はあるが動ける。動いた後で疲れが増す。特に月経前はむくみやすい。帯下はやや多い。便秘する。少し疲れると脚が攣る。凝血塊は時にあるも、それほど多くない。
- 眼はギラツキあり。
- 舌尖部やや赤、薄白苔、舌下静脈やや細い。
- イライラ・月経周期が前後する・胸脇苦満・弦脈：肝気の気滞
- 興奮性の情緒の異常・目のギラツキ・舌尖部の赤み：肝の熱
- 腹痛、便秘：脾胃の気滞
- 筋の攣り：肝の血虚
- むくみ・帯下の増加：湿
- 凝血塊：瘀血

【弁 証】 肝鬱化熱、肝血虚、瘀血、肝気横逆、湿盛

加味逍遙散に付け加えて

- 凝血塊が目立つ・月経痛が強い・色素沈着が目立つ場合は瘀血がより強いので桂枝茯苓丸を追加する。
- ほてりが強い・興奮・入眠困難感が強い場合は内火ととらえて黄连解毒湯を追加する。
- ゲップ・腹部膨満感・咽頭部違和感が強い場合は気滞が強いと考えて半夏厚朴湯を追加する。
- 加味逍遙散が途中で不応もしくは腰のだるさや皮膚の乾燥が強くなった場合には腎陰虚が背景にあることから、六味丸を追加する。

● 症例2 67歳 女性、主訴：ホットフラッシュ(図4)

本症例は、肝火上炎、肝気鬱結、肝血虚、血瘀と弁証し、加味逍遙散を処方した。本症例も熱症候が強いタイプの加味逍遙散ととらえることができる。

● 症例3 55歳 女性、主訴：動悸(図5)

本症例は、肝鬱化熱、心煩、肝気横逆、肝血虚と弁証し、加味逍遙散を処方した。本症例は、熱が心の症状に影響しやすいタイプという形で現れてきたときの加味逍遙散と考えると良い。

● 症例4 31歳 女性、主訴：情緒が不安定、月経痛(図6)

本症例は、肝鬱化熱、肝気横逆、血瘀、血虚、瘀血の弁証で、加味逍遙散を処方した。本症例は、精神症状が前面に現れるタイプの加味逍遙散ととらえることができる。

図4 症例2 67歳 女性

【主 訴】 ホットフラッシュ

【現病歴】 30歳代で子宮癌、卵巣子宮の摘出後から突然の熱感と顔面の紅潮が出現するようになった。ホルモン補充療法で症状は2~3回/週程度。高齢のため、この半年は当帰芍薬散で加療されるも、症状のコントロール不良のため紹介受診した。

【現症・漢方的所見】

● 夜間にホットフラッシュが多く入眠困難、就寝中も起こり目覚めることもある。イライラは軽度。精神的な動揺や、疲れると増加。眼は疲れやすい。脚も時々攣る。暑がり寒がりには特にならない。ため息は軽度あり、食欲あり、倦怠感なし、腰痛なし。

● 眼：軽度ギラツキあり。

● 脈診：右尺やや虚、右寸・関は浮実、左脈は全体に弦。

● 舌診：舌下静脈やや怒張、舌尖やや赤。

● 腹部：臍下に手術痕あり、臍左傍の圧痛軽度あり。

【弁 証】 肝火上炎・肝気鬱結・肝血虚・血瘀

図5 症例3 55歳 女性

【主 訴】 動悸

【現病歴】 約1年前より動悸感があるが、検査では異常は指摘されなかった。約半年前より安静時に動悸を感じる。更年期症候群の疑いで処方された茯苓飲合半夏厚朴湯は無効。

【現症・漢方的所見】

● 日中・夜間で症状の差はない。仕事が多忙だと症状が悪化する。上半身のほてり感があり、自然と発汗する。頸肩のはったような凝り感あり。回転性の眩暈もこの半年の間に1回あった。イライラはない。焦燥感あり。睡眠も問題なし。食欲はあるが、やや亢進傾向。便秘と下痢を繰り返す。眼の疲れを感じる。眼輪筋の痙攣なし。下肢の攣りあり。

● 脈診：両側やや弦脈。

● 舌診：舌質淡紅、やや胖大、薄白苔。

● 腹診：腹力3/5、心下痞輕度。

● 太衝・肝俞・肩井：圧痛あり。

【弁 証】 肝鬱化熱、心煩、肝気横逆、肝血虚

図6 症例4 31歳 女性

【主 訴】 情緒が不安定・月経痛

【現病歴】 約1年前より、徐々に月経の約1週間前より理由もなくイライラし、家族にあたるようになった。月経痛がひどく、月経の最初の3日間は鎮痛薬を連用する。

【現症・漢方的所見】(月経5日前に診察)

● 月経前は口が苦くなる。少し疲れると脚が攣る。月経の約1日前から3日目までは腹痛が出現する。食欲はあるが胃もたれしやすい。特に月経前はむくみやすい。帯下はやや多い。便秘はない。経血中の凝血塊あり。冷え性で手足は冷えるが、顔はややほてる。眠りが浅い。特に月経期に増悪する。

● 非常にハイテンション。眼はギラツキあり。

● 脈診：弦、やや数、右関脈：按沈やや無力。

● 舌診：舌尖部の赤さが目立つ、舌苔変化なし、舌下静脈やや細い。

● 腹診：胸脇苦満、心下痞。

【弁 証】 肝鬱化熱、肝気横逆、血瘀、血虚、瘀血

● 症例5 48歳 女性、主訴：倦怠感、手足の皮疹(図7)

本症例は、肝血虚・肝気鬱結、内風、血瘀と弁証し、加味逍遙散に四物湯を併用した。血虚が目立つ加味逍遙散の病態である。痒みや皮疹については『勿誤薬室方函口訣』や『女科摘要』にも記載がある。

図7 症例5 48歳 女性

【主 訴】 倦怠感、手足の皮疹

【現病歴】 約5年前より皮膚科で掌蹠膿疱症の加療をされるも症状は改善しない。倦怠感も強く補中益気湯+十味敗毒湯(皮膚症状が強いときは温清飲の併用)による加療で改善傾向となっていた。

【現症・漢方的所見】

● 動いているときはよいが、休むと疲れる。休みの日は家事もできず一日中、寝て過ごしている。息切れや動悸はさほど感じない。手足の末端の冷えを感じるが、体幹部の冷えは感じない。食欲はあるが、多くは食べられない。胃もたれなし。やや便秘傾向。眼の疲れをきたしやすく、この3年ほどで視力が低下しているように感じる。脚は時々攣る。髪の毛は折れやすくなった。この2年は月経量が減少している。月経の始まりの2日間は下腹部痛がある。凝血塊は出ない。月経周期はやや乱れがちで早くなったり遅くなったりする。疲れるとイライラしやすい。眠りは入眠困難感と中途覚醒があり、特に中途覚醒が起きやすい。

● 顔色：萎黄~淡白、目のギラツキ軽度、手掌・足底はやや発赤、落屑が多かゆみがある。明らかな膿疱はない。

● 脈診：両側脈細、弦、按じてやや洪、両側寸脈やや滑。

● 舌診：舌質 淡紅、舌尖部やや紅、薄白苔、舌下静脈やや細。

● 腹診：腹力2/5、左胸脇苦満軽度、両側腹直筋緊張ややあり。

【弁 証】 肝血虚・肝気鬱結、内風、血瘀

加味逍遙散の類縁処方との鑑別

● 半夏厚朴湯(図8：次頁参照)

半夏厚朴湯が適応となる病態は気滯である。気滯が上昇傾向にあるところに特徴があり、気の上昇による咽頭痛、咽頭部の詰まり感や、軽度のイライラや興奮傾向といった症状に有効である。

● 桂枝茯苓丸(図8：次頁参照)

桂枝茯苓丸の適応となる病態の中核は瘀血である。瘀血のために生じた気滯が上逆することで陽性の精神症状が出現し、気の上昇が妨げられるために下半身の冷えが生じるが、上半身はのぼせ傾向で興奮性の精神症状が現れやすい。ただし、桂枝茯苓丸は下半身の冷えや陽性の精神症状がなくても使うことができる。

● 柴胡加竜骨牡蛎湯(図8：次頁参照)

柴胡加竜骨牡蛎湯の適応となる病態は、鬱結した肝気が熱に変化し、心に影響を与える肝火凌心である。イライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と、過覚醒により生じた不安や情緒の不安定さが生じる状態に用いる。







知っておきたい加味逍遙散の基本と臨床のポイント

● 加味帰脾湯 (図8)

加味帰脾湯の適応となる病態は、心血虚、脾気虚、肝の気滞、気の熱化である。心血虚は病的不安感や熟眠障害が

生じやすい。消耗、虚弱に伴うエネルギー不足と病的な不安、熟眠障害、さらにイライラや興奮、焦燥感などが加わった状態に用いる。

図8 加味逍遙散の類縁処方との鑑別

<p>半夏厚朴湯</p> 	<p>気滞：抑うつ、イライラ、ガスや物体がないものが詰まる。気は上昇したり・熱化すると陽性の精神症状になる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 滞った気が上昇傾向になる。 ● つまり、イライラなどの陽性の精神症状を伴うガスや物体のない詰まり感に有効。 ● 別名：大七気湯。 ● 七気病：情動の乱れによって生じる様々な症状の総称。
<p>桂枝茯苓丸</p> 	<p>瘀血：月経痛・凝血塊、色素沈着、血栓。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 瘀血のために、気滞が生じて上逆することで陽性の精神症状が出現。 ● 気の下降が妨げられるために下半身の冷えが生じる。 ● 桂枝茯苓丸は温めつつ、瘀血を除き、気を下降させる。
<p>柴胡加竜骨牡蛎湯</p> 	<p>肝火凌心：鬱結した肝気が熱に変化し、心に影響。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 肝の気滞が熱化したものが、心に影響している状態。 ● つまり、イライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と過覚醒に伴う不安と焦燥や情緒の不安定性が生じている。
<p>加味帰脾湯</p> 	<p>心血虚：病的な不安 (予期不安)、熟眠障害。</p> <p>気虚：疲れ、消耗、エネルギー不足。</p> <p>肝の気滞：イライラ、抑うつ。</p> <p>気の熱化：易怒、興奮などの陽性症状。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 心血虚、気虚があるところに肝の気滞や熱が合併しているのを、心血と気を補い、熱を消散させる。 ● つまり、消耗に伴いエネルギー不足と病的な不安や熟眠障害が生じる。さらにイライラ、焦燥、熱感が加わる。
<p>当帰芍薬散</p> 	<p>肝気横逆：腹部の引きつような、差し込むような痛み。</p> <p>血瘀：月経痛、末梢の冷え。</p> <p>肝血虚：眼のかすみ、爪・髪への傷み、月経量低下。</p> <p>脾気虚：下痢、食欲不振。</p> <p>水湿：浮腫、白色帯下の増加。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 脾気虚・水湿を背景に、肝気横逆、血虚・血瘀を呈している。 ● 下痢、腹痛、浮腫、帯下の増加、月経痛、手足の冷え、眼のかすみ、爪や髪のもろさ、月経量の低下。
<p>抑肝散加陳皮半夏</p> 	<p>肝の気滞：イライラ、抑うつ。</p> <p>内風：突発的な情動発作。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 抑肝散は、肝の気滞を背景に起こった内風 (気の過剰運動) に使用される。 ● つまり、我慢、イライラによって起こる突発的な情動発作、自罰的な性格傾向。 ● 歯ざしり、レム睡眠障害。 ● 抑肝散加陳皮半夏は気鬱 (気の抑うつ傾向の強い気滞) の合併例に特に有効。

● 当帰芍薬散 (図8)

当帰芍薬散は脾気虚・水湿を背景に肝気横逆、血虚・血瘀を呈し、下痢や腹痛、月経に乗じて腹痛だけではなく下痢を伴う、また月経期の浮腫や帯下の増加、月経痛、手足の冷え、眼のかすみ、爪や髪のもろさ、月経量の低下などの症状が現れる場合に用いる。

● 抑肝散加陳皮半夏 (図8)

抑肝散は、肝の気滞を背景に生じる内風の病態に使用される。つまり、気の流れが滞ることで我慢、イライラによって起こる突発的な情動発作や自罰的な性格傾向の方に使用される。抑肝散加陳皮半夏は気鬱の合併例に有効である。

加味逍遙散の諸症状への応用

加味逍遙散の諸症状への応用を図9に示す。

加味逍遙散の要点 (図10)

加味逍遙散は、更年期をはじめとする比較的虚弱な女性に現れる肝鬱化熱、肝血虚、肝気横逆、血瘀の病態に用いる処方である。

図9 加味逍遙散の諸症状への活用

- 更年期障害 (情緒不安定、イライラ、倦怠感、ほてり、筋の攣り、腹痛、便秘、むくみなど)。
- 婦人科癌治療後の卵巣機能喪失による更年期様症状 (ホットフラッシュ、不眠、イライラなど)。
- 月経前症候群 (月経前のイライラ、情緒不安定、月経痛、手足の冷え、ほてりなど)。
- 月経不順・月経困難症。

図10 加味逍遙散の要点

- 肝鬱化熱：イライラ、熱感、多罰的、側頭部の凝り。
- 肝血虚：下肢の攣り、眼の疲れ、肌や髪の色艶の低下。
- 肝気横逆：腹部膨満、便秘、腹痛。
- 血瘀：月経痛、手足の冷え。

《類縁処方との鑑別》

抑肝散加陳皮半夏：情動失禁・イライラ・自罰的 (肝風内動)。

柴胡加竜骨牡蛎湯：イライラ・焦燥・過覚醒 (肝火凌心)。

当帰芍薬散：腹痛・下痢・浮腫・月経痛・下肢の攣り (肝血虚・血瘀、肝気横逆)。

桂枝茯苓丸：月経痛・凝血塊・下半身の冷え・上半身ののぼせ (瘀血)。

半夏厚朴湯：咽頭部などの痞え感、腹部膨満、ややイライラ。